

紅衛兵運動と「大交流」

岩 村 三千夫

中国の紅衛兵は、プロレタリア文化大革命の突撃部隊として、きわめてはなばなしい役割を演じた。もちろん運動はまだつづけられており、こんどそれがどのような展開をみせるかは予断のできないものがある。日本においては、紅衛兵運動について、その初期にきわめて大がかりな中傷がおこなわれ、一部の人たちはこれを極左盲動分子の活動であるとか、「ジャリ革命」であると評した。筆者は、こうした誤った宣伝を批判して、66年9月に本誌のために「紅衛兵運動の第一段階」をまとめた。（「中国研究月報」223号）それは、当時のごくとぼしい資料でまとめられたもので、紅衛兵の「大交流」運動以前の状況をまとめたものであった。そのご、筆者は、66年11月末から12月末にかけて中国を訪問して、各地で紅衛兵と座談会をおこない、紅衛兵運動の展開過程について質問することができた。これらの質問でも確認されたことは、紅衛兵の運動は、けっして上から行政的に組織したものでなく、中共によって青年の情熱を百パーセントに発揮できるよう配慮されており、したがって各地、各学校によって運動の経過、内容、運動の重点に大きなちがいがあるということである。筆者の訪問したとき、運動が全国的にはじまってまだ三ヶ月をすぎたばかりでもあったので、その運動の全国的特徴を概括するような話をきくこともできなかった。しかし、それでも、日本の訪問者が紅衛兵と5回もの座談会をやれたのはあまり例がないとのことで、これらの座談会でえた資料は、紅衛兵運動の概況を知るうえで、やはり貴重なものとみななければならない。

そういう関係から、わたしは、これらの資料を土台にして、ここにかさねて「紅衛兵運動の第一段階」をまとめてみた。わたしたちが、中国で座談会をおこなった紅衛兵の各单位をあらかじめ列記するとつぎのとうりである。

- (1) 北京大学紅衛兵 (2) 瀋陽市各中学校紅衛兵代表（11の中学，専門学校） (3) 上海第一師範学校紅衛兵 (4) 江西共產主義大学紅衛兵 (5) 長沙師範学校紅衛兵

I 初期の闘争状況

（１）紅衛兵形成過程の特質

紅衛兵運動をみていくばあいの一つの問題点は、それがどこまで若い世代の自然発生的な運動であったのか、あるいはどのように共産党のよびかけに応え、共産党に支援された運動であったのか、ということであった。これについては、さきの論文でもいちおうの見解をのべたが、今回の各地の座談会で、やはりこのことを知りたいと思った。

さきの論文でも指摘したように、紅衛兵の運動が、共産党、とくに毛沢東主席の全面的な声援のもとに展開されたことは疑う余地もない。全国の青年が紅衛兵というものの存在を知ったのは、66年8月18日の北京におけるプロレタリア文化大革命祝賀大会の報道によってであった。もちろん、そのまえに中共中央委員会は「プロレタリア文化大革命についての決定」を公表している。そして毛沢東主席が天安門のうで紅衛兵の腕章をつけたことが、全国の紅衛兵運動に大きな刺戟をあたえたのであった。つづいて、この大集会においうちをかけるように、8月31日に第2回の集会が、9月15日に第3回の集会が北京でおこなわれた。この二つの集会は、ともに中共中央の文化革命小組の責任者が司会した全国から集った紅衛兵と革命的教師、学生の集会であった。おそらく、これらの集会への参加者の列車賃や宿泊場所も政府や党の援助で提供されたと思われるし、これらの集会には毛主席が出席して大衆と「接見」している。

こういう中共中央文化革命小組を中心とする働きかけは、紅衛兵運動を燎原の火のように発展させた大きな要因であった。しかしそのことは、紅衛兵運動が本質的に中共中央によってつくりあげられた運動であるということを意味しない。学生のあいだに、文化大革命のよびかけに答えて起ちあがる気運が大きくもりあがっていたからこそ、文化革命小組は、このような集会をつぎつぎと組織できたのであり、また集会への参加者は、文化革命小組の予想をこえてひろがり、そのなかで「大交流」とよばれる新しい運動形態へこの発展がみられたのである。

紅衛兵運動のこうした経過については、66年8月・9月のとぼしい資料でも、だいたいにおいてたしかめることができた。（「中国研究月報」223号拙稿4頁）そして、こんどのわたしの各地訪問のなかで、それをさらに確認することができた。

a. 北京大学における運動の発端

わたしたちの訪れた北京大学では、同大学における文化大革命運動発展を示す展覧会がおこなわれていて、そこにおける紅衛兵運動の展開が、65年11月以降の文化革命のよびかけのもとでおこされたことをあきらかにしていた。周知のように、65年11月には、上海の文匯報に姚文元が

呉晗の「海瑞が官を罷める」をはげしく批判した論文がのり、66年4月18日には「解放軍報」が「毛沢東思想の偉大な赤旗を高くかかげ社会主義の文化大革命に積極的に参加しよう」という社説をかかげた。66年5月10日の上海の解放日報と文匯報では、姚文元が「三家村を評す」を発表してかさねて呉晗や鄧拓など元中共北京市委員会の幹部を批判した。

こうした文化大革命のよびかけにはげまされて、北京大学の聶元梓という婦人講師と哲学科の学生たち7人が5月25日に大字報を書いて学校当局の修正主義路線を批判した。この大字報は、学生のあいだに大きな反響をまきおこして、たちまちのうちに多くの大字報が学生によって張られた。校長の陸平らは、これを圧迫しようとしたが、これよりまえに中共北京市委員会の偏向にたいして毛沢東主席が鋭い目をはなっていたので、6月1日には聶元梓らの大字報の全国的な発表が決定されて、ラジオで放送された。また6月2日付の「人民日報」は、7人の大字報の全文をのせ、評論員の論文として「北京大学にでた一枚の大字報に歓呼の声を送る」という論評をおこなった。こんど各地をまわってみて、この6月1日のラジオ放送と人民日報の報道が各地の先進的學生を大きく激励したことを知った。ところが、北京大学では、このあとできた北京市委員会から工作組が派遣されて、その行動は革命的學生の大きな不満をかった。そして、学生たちは、7月12日には「運動を新たな段階に発展させよう」という大字報をはって、運動をひろげた。

この北京大学學生の運動は、中共中央部のなかでも大きな問題となったとみえて、7月1日には陶鑄が、7月25日には江青が、8月4日には朱徳が北京大学にきて報告または演説をし、8月4日に文化革命委員会準備委員会が成立している。そして、このかんに學生の斗争によって工作組がおいかえされ、學生自身の手で「北京大学紅衛兵」と「新北大毛沢東思想紅衛兵」という二つの紅衛兵組織が結成されている。こうして、北京大学における紅衛兵組織の正式成立は、8月18日の北京大集会のあとであるが、事実上の紅衛兵運動は5月以降展開されていた。

b. 北京各中学の戦闘グループ

北京大学における闘争とならんで、北京の各中学でも、学校当局の修正主義的指導にたいする闘争が開始された。なかでも、もっとも早く闘争の火ぶたをきったものが、清華大学付属中学であったとされている。

清華大学付属中学で、地主階級出身の万邦寿校長批判の大字報がはりだされたのはやはり66年5月であった。これにたいして学校当局の圧迫があったとき、革命的な学生たちが「毛主席を擁護し、反動分子、修正主義を打倒する組織として“紅衛兵”になろう」という大字報をだし、5月29日に40人からなる紅衛兵の組織ができた、といわれている。（読売新聞高木健夫記者視察記、同紙67年1月20日付）

同じころ、北京大学付属中学でも闘争がまきおこっていた。これについて、藤島宇内氏が、66

年9月19日に北京大学附属中学の「紅衛兵」からききだしたつぎの話が注目される。（「朝日ジャーナル」66，10，16日号）

「私たちの学校の紅五類（労働者，貧農，革命幹部，軍人，革命烈士）の子弟である学生たちも，学校に修正主義者がいるから，それをなんとかしなければと思って，毛主席の『むほんは道理にかなっている』という精神によって友だち同志意見を話しあうようになったのが今年の3月ごろでした。どうしても斗争しなければならぬということで意見が一致して，戦闘的なサークルをつくったのは6月2日です。そのときの人数は14人でした。」

ところが，7月のはじめになると，この附属中学へも北京大学の幹部と大学生からなる工作隊が派遣されて運動をおさえにかかった。そのころ，戦闘小組は「紅旗戦闘小組」の名のもとに300人ほどになっていたが，この圧迫で140人に減ってしまった。しかし，7月25日になって，ここへも江青を責任者とする一行が毛主席の指示でやってきて，やっと工作隊をおいかえしてくれた。

66年6月ごろに，北京の他の高級中学でも文化革命の気運がもりあがっていたことは，北京の二つの中学の学生が，党中央と毛主席に手紙をおくって，ふるい進学制度の廃止を主張していることにも示されている。その一つは，北京市第一女子中学，高級部3年4組の生徒で，6月6日に手紙を書いて，ふるい進学制度を廃止して，高級中学卒業生が「直接，労働者，農民，兵士のなかにはいり，労働者，農民，兵士と結びつく」ことを主張している。もう一つは，北京市第四中学高級部3年5組の学生で，これは6月11日付で手紙をだして，第一女子中学の呼びかけを熱烈に支持するといっている。そして，現行の大学入学試験制度は，「ブルジョアジーの後継者を養成し，修正主義による復活をおこなう重要な手段となっています」とのべている。

この北京の二つの中学生の入試制度改革についての要請は，このときいちはやく，中国共産党と国務院によってとりあげられた。中国共産党中央委員会と国務院は6月13日付で通達をだして，文化革命を徹底的におこない，教育制度を徹底的に改革するために，大学の入試制度を徹底的に改革することと，それだけでなく66年度の大学，専門学校の学生募集を半年延期することにした。この通達は，大学，専門学校と高級中学校で文化大革命がもりあがっていることを認めたくて，「この運動のつっこんだ徹底的な実行は一定の時間がなければできない」としている。これは，中共と国務院が，正式に中等以上の学校における文化大革命の徹底的逐行を支持したもので，学生たちに大きな刺戟をあたえた。この決定は，6月17日夜，ラジオで放送されたが，北京の革命的教員と学生は，すぐ中共中央や国務院に祝賀の手紙をとどけ，また天安門広場に集って集会をひらいて，文化大革命の徹底的逐行を誓いあっている。そして，北京におけるこのような動きは，各地の学生に敏感にうけとめられていった。

c. 二つの師範学校のばあい

こんど、わたしたちが各地で会った紅衛兵のうち、瀋陽のばあいには、10の中学・高校の代表がでていたが、瀋陽の紅衛兵の運動は北京の8月18日の集会のあとにおこったとのべていた。しかし、上海の第一師範学校と長沙の師範学校では、紅衛兵が正式に結成されたのは8月18日集会のあとであるが、学生のあいだの戦闘小組は5月から6月にかけて大量に結成され、学内で大字報をはる活動も、北京大学の大字報のはげましをうけて6月から開始されたとのべている。上海第一師範では、6月ごろから多くの戦闘小組ができて、一方で毛沢東選集を学ぶとともに、一方で大字報を書いた。あるクラスでは7つもの戦闘小組がつけられた。そして、8月18日の北京大集会がいちだんとかれらを激励して紅衛兵組織を結成させた。長沙の師範学校では、5月から学内で鄧拓、呉昨批判の大討論がおこり、8月18日の北京大集会の報をきいたあとで8月19日に一つの紅衛兵組織が成立、つづいて8月22日に第2の紅衛兵組織が成立した。

(2) なにと闘い、なにをやつたか

a. 学習と街頭宣伝の結合

66年8月18日に紅衛兵が天安門にあらわれていど、紅衛兵の最初の活動として世界的に注目されたのは、かれらの街頭宣伝活動であった。この活動についても、商業新聞がきわめて歪曲しながら報道して、そのどここれを訂正していない。しかし、当時の紅衛兵の活動が、いわゆる「暴走」でもなければ「そうじょう」でもなかったことは、いまでは世界的に承認されている。

それにしても、初期の紅衛兵の活動のなかに、青年の情熱をもやしたはげしいものがあったことは、こんどのわたしの中国訪問によっても確認することができた。当時、新華社通信が報道しなかったことでは、紅衛兵たちは、各地で反動分子と目される人の家の捜さくをして、かれらがかくしていた反動的な文書や武器の発見をしている。

たとえば、北京大学の学生は、同大学の教授で観念論哲学者として有名な馮友蘭の家を捜査して、国民党の軍刀や蔣介石の写真を押収している。北京大学では、さらに数人の反動教授の家がそうさされて、国民党の文書や反共的なメモが発見されている。

上海第一師範の紅衛兵も、学外の反動分子の家をそうさして、武器などをさがしあてている。このばあい、かれらはどの家があやしいということについて、学生があつめた情報に頼っただけでなく、その地区の共産党組織と連絡をとっておこなったとのべていた。

そのほか、人民公社のなかでも、紅衛兵運動の初期に、元地主や官僚であってほんとうに改造されていない分子の家宅捜査がおこなわれていた。人民公社にも中学があり、かれらはやはり紅衛兵に参加して、こうした活動をおこなったのである。

初期の活動で注目されたことの一つはふるい街名、店名の変更であったが、こんどわれわれの会った紅衛兵のなかには、自分の名を変えたものもかなりにあった。上海の第一師範の紅衛兵の一人である毛小弟は毛小兵と名をかえていた。また同じ学校の女子紅衛兵の范奎珠も名を范奎武とかえていた。後者の理由は、珠という名はやさしすぎるので、「武」としたとのことであった。そのほか、瀋陽の労働者住宅を訪れて会った同市の遵義紅色中学の学生楊永紅は、もとの名は楊秀芳であった。この遵義紅色中学という名も紅衛兵運動の所産であって、もとの校名は瀋陽五三中学であった。

これでわかるように改名運動は個人の名にまでおよぶ広範囲のものであった。そこにわれわれは青年らしい情熱の奔流をみることができる。しかし道路の改名の多くは、紅衛兵の提案があったままで、確定していなかった。なぜならば、紅衛兵の提案の多くが、東方紅路とか延安路などであって、そのまま決定すれば同名の道がいくつもできることになったからである。北京の天安門の前の大通りは、いまでも長安街であって東方紅路ではなかった。上海の南京路もそのままであった。

こうした初期の活動のなかで、そのころしかるべく報道されなかったのは、かれらがおこなった毛主席語録の学習、宣伝の活動である。一般新聞の記者にとって、これはあまりに平凡な活動とみえたのかもしれない。しかし、学生たちが「紅衛兵」という形をとっていらい、「毛主席語録」はかれらの活動の指針であった。どの学校の紅衛兵たちも一日に何回かの学習時間を設定していたが、その学習は「毛主席語録」を中心にして毛沢東の著作を主要な武器としておこなわれている。

また学生たちは、語録からぬきだした言葉で都市や農村をかざった。こんにち、中国のあらゆる街頭に、毛主席の語録の文字が書きこまれているが、そのかなりの部分は紅衛兵たちの手で書きこまれたものである。

b. 反動的教育路線とのたたかい

街頭宣伝は、66年8月から9月にかけての紅衛兵運動で高い比重をしめていたが、しかしこの時期にも、かれらは同時に学内の反動的権威者との斗争をおこなっている。

北京大学では、当時の校長陸平に代表される修正主義とのはげしい斗いとともに、哲学者馮友蘭などの反動的権威にたいする闘争がおこなわれた。同大学の文化革命運動史の展示によると、陸平の罪行は、つぎのようにまとめられていた。

- (1) 毛沢東思想の学習に反対して学生の政治活動をおさえたこと。
- (2) 私党を結んでブルジョア独裁をおこなったこと。
- (3) ブルジョアジーの反動的権威と結んで反党、反社会主義の主張をとなえた。
- (4) 修正主義教育路線の推進。
- (5) 社会主義教育運動を圧迫して反革命事件をねつ造した。

(6) プロレタリア文化大革命のきちがいじみた破壊。

同じ展示は、もとの北京大学にいかにも社会主義国であってならないことがおこなわれていたかの数々の事実をばくろにしている。たとえば、旧校務委員会の43名の構成は陸平派10名(32.6%)、ブルジョア教授31名(63.3%)で革命派は僅かに2名(4%)にすぎなかった。この校務委員会のもとで、労農出身の学生は、さまざまな差別をうけた。62年の1年に全校で42名が退学させられたが、そのうち労農の子弟は32名で79%をしめていた。こうした反動的な教育方針とのかいなかで紅衛兵の運動がひろがっていったのである。

c. 上海師範学校のたたかい

上海第一師範の紅衛兵たちの活動は、きわめて典型的に多面的であった。

まず初期の街頭活動ではつぎのことをやっている。(1)ブルジョア的な髪形をなおす宣伝をドラをたたいてやった。とくに頑固な者とみたときには紅衛兵がハサミで切った。(2)ふるい店名をかえ、上海の旧租界の建物にあった海賊の頭をえがいた飾りを取りはらった。(3)静安寺という区の名を延安区と改めた。(4)反革命分子や地主の家をそうさして武器や昔の土地台帳を取りあげた。

しかも同時に、学校の党支部委員長と党内の学術「権威者」にたいする闘争をくりひろげている。この学校の党支部委員長は、つぎのような反動的な指導を学生におしつけていた。(1)学生が毛沢東著作の学習グループをつくっているのにたいして「自習」を重んずべきだと勧告した。また毛主席の著作についてもよいものはとりいれカスはすてよ、とのべた。(2)学生たちが農村に行って貧農、下層中農と交流して涙を流してわかれたとき、党委員長はそれは小ブルジョアの感情だといった。(3)文化大革命のよびかけの下に学生たちが大字報をはると党委員長は大字報ではなくて小字報を書けといった。(4)この委員長の下に、学内にブルジョア知識分子のグループが形成されていた。国文教研室の主任は反革命分子であり、物理教研室の主任はブルジョア知識分子であり、体育科の閻波という教官は国民党時代からの教官で学生を粗暴にあつかった。(5)学校全体で点数主義が採用されていた。

またこの学校にも、歴史と国文を担当している学術権威者がいた。かれは62年に一つの脚本を書いて、唐の太宗の時代の大臣魏征のことにかこつけて、唐の太宗も下からの意見をうけいれている、という風刺をした。このことは、北京の呉晗が「海瑞が官をやめる」でやったのと同じことがさまざまな人によってやられていたことを示している。そして、学生たちはこうした「学術権威者」にたいして果敢な闘争をおこなって、かれらの反動の姿をあかるみにだした。

d. 長沙師範学校のたたかい

長沙師範学校の紅衛兵は、紅衛兵成立当初の中心的な活動はなんであったか、とのわたしの質問にたいして、党内の実権派と学内の学術権威とのたたかいであった、と答えている。もちろん、そ

の意味は、かれらが街頭宣伝活動はやらなかったという意味ではないが、それとならんで、文化大革命の本来の内容であるものと、はじめからとりくんでいたのである。

この学校では、副学長の羅三徳が、党内の実権派でもあり、いわゆる「学術権威」でもあった。かれは大地主の出身で、そのご革命運動に加わった人物であった。反右派闘争のときにも、かれは党の政策を批判する言動をおこなったので、「留党監督」という処分をうけた。しかしそのごも学生にむかって古典を学ぶことを一面的に強調したし、学生が軍事訓練を受けることにも反対した。また学生が毛沢東著作の学習をおこなうことにしぶい顔をしていた。紅衛兵が成立していらい、まずこの羅三徳にたいして鋒先を集中した。

こうした紅衛兵の活動にたいして、この学校の党委員会は「恐れ」を示したらしく、われわれが訪問したときに、党委員会のブルジョア反動路線を批判せよ、というスローガンがいくつもはられていた。このことについて質問すると、反動路線とは大衆を思いきってたちあがらせないことであるが、党委員会そのものは敵ではないし、反動派でもない、と紅衛兵たちは語っていた。

こういう斗争をつうじて、どういう成果を収めたと思うか、という質問をだしたところ、紅衛兵たちは、つぎの3点をあげていた。

(1) この文化大革命で階級斗争の複雑さをしみじみと自覚した。自分たちは赤旗のもとで育ったが、このたびの教訓がなければ階級斗争を理解できないで変質していたであろう。

(2) 毛沢東思想をいっそう熱愛することができた。毛沢東思想がマルクス・レーニン主義の最高峰であることをしみじみと感ずる。

(3) これまでは反動的な学閥が毛沢東思想に反対していたので、毛沢東思想の活用ができなかったが、いまでは全くちがっている。いまでは、子供でも「人民に奉仕する」ことを知り、長沙市民の精神的様相がかわっている。小さい子供たちも至るところで「語録」の歌をうたい、バスのなかで年寄りに席をゆずっている。

（3） 紅衛兵組織の若干の特徴

紅衛兵の運動は、その初期から以上のような多面的な活動分野をもっており、そのうえ、9月中旬以降にはつぎにのべる「大交流」と「長征」という新たな運動形態が創造されていった。この運動の初期において、一部の報道は「紅衛兵条令」というような統一的な規約めいたものがあることをも報じた。（「中国研究月報」223号6頁）しかし、そのごそれを確認できるものはないし、わたしたちは訪問中に、一つの学校にもいくつかの紅衛兵組織が存在することを確認した。また、はじめは、紅衛兵組織の階級性ということがきわめて強調された。（前同7頁）しかし、わたしたちの訪問中に、それが一時的にあらわれた傾向にすぎないことを確認できた。

a. 紅衛兵と紅五類の関係

紅衛兵の成立にあたって、紅五類の子弟が中心となったことは、当時の多くの報道が伝えていた。問題は、そのごも長く紅衛兵は主として紅五類の子弟によって構成されていたかどうかである。この問題について、わたしはいくつかの座談会でたずねたが、それによると、紅衛兵は成立当初には紅五類という出身を重視したが、まもなく、出身だけにこだわるべきでないという意見が有力となり、現在では、大部分の学校で、紅衛兵は紅五類の子弟に限られないことになっている。

(1) 瀋陽であった紅衛兵たちは、紅衛兵は階級路線を執行するので、大部分は紅五類の子弟であるが、そうでないものも、旧家庭、旧思想と袂別しているものは加わることができる、と答えた。

(2) 上海第一師範学校のばあいには、紅衛兵成立前に、形成されていたいくつかの戦闘小組も、学校当局にたいする批判的立場のものが集まったのであって、そのばあい出身は問題にされていなかった。そのご北京に学んで紅衛兵を組織した当初は紅五類の子弟であることを重視したが、しかし出身だけで判断することはしなかった。運動の初期に、一部のものが「おやじが英雄ならば子も英雄である」というスローガンをだした。しかし、学生たちは、出身は個人の努力によってかえられるものではなく、大切なことは政治的立場であることを討論した。これによって唯出身論は誤りであるということに95%が意志統一した。

(3) 長沙師範学校の紅衛兵たちは、その前身である「戦闘小組」のころから階級路線は重視したが、しかし唯出身論ではなかったと言明した。

なお、運動の初期に、「紅五類」が一面的に強調されたことの意味について、67年元旦の人民日報と紅旗の合同社説「プロレタリア文化大革命をやりぬこう」は、つぎのような評価をおこなっている。

「わが党が毛主席の階級路線にしたがってプロレタリア文化大革命の隊列を組織しているその時に、ごく少数のブルジョア反動路線を堅持している者は逆に「親が英雄であれば子もたのもしい男、親が反動であれば子もろくでなし」というスローガンを利用して、一群の学生をまどわし、派閥をつくり、階級戦線を攪乱した。このスローガンは最初是一部の純真な青年が提起したもので、かれらは思考方法の面で若干の一面性があるため、党内の一にぎりの資本主義の道を歩む権力派が革命幹部の子弟や労働者・農民の子弟を排斥し攻撃することに反対するという正しい前提から出発して、別の極にまで行ったのである。これらの純真な青年に対しては、順を追って導いてやらなければならない。われわれの党は、当時から、そういうふうにしてきた。ブルジョア反動路線を頑固に堅持する者は、逆に下心を持ってこのスローガンを利用し、ごく少数の学生（その中の一部は十分に教育を受けていない幹部の子弟）をだまし、かれらを邪道に引き込み、ほかの一部の学生と対立させようとした。このようにして、「親が英雄であれば子もたのもしい男、親が反動であれば子もろく

でなし」というスローガンは、プロレタリア革命路線と対立するものとなった。指摘すべきことは、下心を持った者はこのスローガンを利用して、實際上、搾取階級の反動的血統論を宣伝したことである。封建地主階級は「龍は龍を生み、鳳凰は鳳凰を生み、ねずみは子を生むのに穴を掘る」などと宣伝しているが、これこそまぎれもない血統論である。それは徹頭徹尾反動的な史的唯心論である。」

6. 紅衛兵のいくつかの組織

中国を訪問するまえに、わたしは北京に三つの紅衛兵司令部があるという報道に接していた。しかし、それらは、いくつかの学校の紅衛兵組織がその学校の性格によって集ったものであるぐらいに考えて、一つの学校のなかに二つの紅衛兵組織があることには気づかなかった。しかし、こんど中国にいてみて、北京大学でも、上海第一師範でも、長沙師範学校でも、二つ以上の紅衛兵組織があることがわかった。しかも、関係者たちがそれを悪いことと思っていないことを知った。

北京には、「大学専門学校紅衛兵司令部」（通称第一司令部）と「大学専門学校紅衛兵総部」（通称第二司令部）と「大学専門学校紅衛兵造反総司令部」（通称第三司令部）の三つの連絡司令部があった。これらは、三つとも大学、専門学校紅衛兵の組織であるから、大学と中学という区別ではない。わたしたちは北京でこの三つの組織の相互関係についてきくことはできなかったのが、そのごの報道では、いわゆる第一司令部と第三司令部は政治的に立場がちがいが、第二司令部はかなりちがった立場をとっている、といわれている。

北京大学には、北京大学紅衛兵と新北大毛沢東思想紅衛兵の二つの組織があった。この二つの組織の相互関係についても、この二つの組織がそれぞれどの司令部に属しているかもきくことができなかった。それは北京大学を訪れたとき、われわれがこの問題に興味をもっていなかったからである。瀋陽では、われわれは約10の中学と専門学校の紅衛兵代表と座談会をもったのであるが、かれらのなかには、「毛沢東思想紅衛兵総部」「紅后代総部」「紅衛兵中学総部」という三つの総部に属する人たちがふくまれていた。かれらは三つの系統にわかれてはいたが、しかしわれわれとの座談会では一堂に会して別に対立もしていなかった。そして、わたしたちの質問に答えて、三つの総部は方針の面でのくいちがいはないとのべていた。しかし、瀋陽市内でわれわれは、このうちの一つの組織が自分たちと他の組織との意見のちがいについてのべた大字報をみた。また瀋陽では、それぞれの総部が、それぞれの規約や条令をもっているとのべていた。そして代表者たちは、将来は三つの総部は統一されるべきものであるとのべた。

上海第一師範にも、「共産主義公社紅衛兵」というのと「上海市紅衛兵」とよぶのの二つの組織があった。この二つの組織は宣伝活動などで共同行動をとるが、個別の問題では意見がちがうとのことであった。その具体的な例としては、中共上海市委員会機関紙の「解放日報」の内容について、

それを全面的に否定する見解と、その欠点は部分的なものであるとする見解の対立があるとのべていた。たしかに、わたしの訪れたとき、中共上海市委員会の傾向とその解放日報の内容は大きな論争問題となっていた。そのころ紅衛兵たちは、いずれも上海市委員会のブルジョア反動路線を批判してはいたが、その批判の角度や範囲については、まだ紅衛兵のあいだにも意見の不一致があったのである。そして学内の紅衛兵組織が将来はどうなるかという問いにたいして、学生たちは、当面はそれぞれの組織で運動をすすめるが、将来は組織の統一に努めるとのべていた。

長沙師範学校にも、「紅色政権保衛軍」というのと「毛主席紅衛兵」との二つの組織があった。上海のばあいと同じように、われわれとの座談会には双方の組織の代表が参加して、われわれの質問には共通の見解をのべていた。なぜ一つの学校で二つの組織があるのか、という質問にたいしては、基本方針のくいちがいはないが、具体的な問題で意見のくいちがいがある、とのことであった。たとえば、一部の人は学校の文化革命委員会の準備委員のなかに毛主席の著作を活用していない委員が選ばれているとしている。この問題で一部の人は準備委員会そのものの解散を主張し、一部の人は改選でよいと主張して意見が対立している。そのほか、学内の党の総支部委員のいく人かの評価について意見のちがいがある。いま、そうした意見のちがいの統一に努めており、将来は組織も統一すべきだと考えているとのことであった。

こうして、紅衛兵運動がはじまって5ヶ月の段階で、紅衛兵の組織は、全国的にも地方的にも、一つの学校内でも統一されていなかった。そして、北京の三つの司令部は、上海のような重要都市には連絡センターをおいていて、北京の運動は地方にも影響をおよぼしていた。しかし、それも、北京の三つのセンターの線で、地方大都市にも三つのセンターがあるというほどに組織的なものとは思われなかった。（このことは確認しなかった。）

それでは、こういった現象はどういう意味をもっているのか。それについてのわたしの感想をのべれば、つぎの諸点が考えられる。

第一に、中共中央も、紅衛兵の運動を地方や学校の党組織に従属させようとはしていない特徴がある。むしろ、学生たちの創意性を十分に尊重してそれに制限を加えないから、党組織の誤りをなおせるという方針がとられている。そこから一定程度の組織分立の現象がでている。これは過渡的に正常な現象である。

第二には、組織の分立そのものは不正常ではないが、しかしそのなかのある部分では、ブルジョア反動路線や反党反社会主義路線にたいする見解の不統一も反映されている。不確実な情報ではあるが、北京では、12月段階では第一司令部と第三司令部は共同して第二司令部に反対している。第二司令部は文化革命小組の批判をうけたともいわれている。そのほか、上海第一師範や長沙師範学校で、「解放日報」の内容や学内の党委員会の評価をめぐる対立があるということは、初歩的に

しろ路線の対立があるということである。しかし、それにしても、紅衛兵運動は、毛主席を最高指導者とあおぎ、毛主席語録と文化大革命についての16条を行動の指針としているのであるから、その組織の一つが全体として反動路線に利用される可能性はすくない。その意味では統一の方向を歩むであろうが、その統一を中共中央の文化革命小組が行政的に推進していないところに、この運動をつらぬいている民主主義の側面をみることができる。

c. 共産主義青年団との関係

日本でしばしば疑問としてだされる共産主義青年団と紅衛兵との関係についてもきいてみた。日本では、共産主義青年団の指導部はダメなので紅衛兵がつくられたと考える人がいるが、わたしの会った紅衛兵はそういうけとり方をしていなかった。紅衛兵運動そのものが創造的なものであり、それは共産主義青年団のよしあしから生れたものではない、との考えである。

瀋陽であった紅衛兵たちは、「共産主義青年団は毛主席が組織されたものであり、紅衛兵もそうであり、二つの組織は兄弟的なものである。当面は紅衛兵の役割が大きい、将来は青年団の活動も強化される。青年団員の大部分が紅衛兵に入っている」と答えた。

上海の第一師範の紅衛兵たちも、こう答えてくれた。「共産主義青年団は党の助手であるから、紅衛兵とは共通点が多い。文化大革命にあたって、ごく少数の青年団員があいまいな立場をとったが絶対多数は正しかった。青年団の組織は革命的であって活動を停止してはいない。ここに来ている紅衛兵はみんな青年団員である。中国が新たに生んだ英雄蔡永祥も青年団員である。」

Ⅱ 大交流の発展と長征隊

(1) 全国紅衛兵の大交流

紅衛兵の運動は第一段階で四旧に反対する街頭活動や学内闘争をやったあとで、つづいて全国の闘争経験を交流する「大交流」の活動に入った。もっとも、げんみつにいて、「大交流」がいつからはじまったかをきめることはむずかしい。紅衛兵運動の第一段階において、北京では8月18日、8月31日、9月15日と大集会がおこなわれた。それぞれ各地の革命的教師、学生にたいする参加の要請がおこなわれたことは想像に難くないし、そのころから北京に集る人たちの汽車賃や北京での宿泊費は無料にされていたと思える。そして、全国の学生と教師は、北京の集会にですぐ帰るわけではなく、北京の大学、中学の紅衛兵との経験交流をおこなっている。また首都北京には地方にはない大規模な博物館（軍事革命博物館や革命博物館）があるので、それを見学もしている。また、せっかく遠くからきたということで、居住地から北京にいたる途中の大都市において、その地方の学生との経験交流をおこなっている。こうして、文化大革命という巨大な思想運動と、紅衛兵という突撃組織の推進のもとでごく自然に大交流という活動形態がうみだされていったのであった。

(a) 予想をこえた交流の発展

この大交流もまた、中共中央と政府の積極的な支持のもとにすすめられた。これまでの例を破って、上京学生のために列車をまわすこと自体が大交流への援助であった。また途中食費や宿泊もいっさい国家の負担としたことは、きわめて重要な処置であった。いっそう重要なことは北京に集った学生たちと、毛主席が何回も会見したことであって、11月25、26日とつづいた接見集会にいたるまで、8回にわたって大集会がもたれあわせて1,100万人がこれに参加したのであった。

北京に集ったのはこれだけであるが、このほかに武漢、広州、上海あたりまでの大交流をやった学生がある。正確な統計はないが、8月18日の集会いらい、66年末までに鉄道系統が輸送した紅衛兵と革命的教師、学生の総数は5,000万以上におよんだと報道されている。（北京67年1月6日発新華社電）

8月18日の集会がもたれたとき、おそらく中共中央にこれだけの計画があったわけではないと思われる。それが8月31日、9月15日と集会をかさねていくうちに、全国の反響が大きく、集会の意義の大きいことが確認されて、いっそう積極的に集会がもたれていったものとみられる。このことについて、はじめのころ共産党の中央で全国の大学生のほとんどすべてと、中学生について

はおおまかに10名に1人が北京にくるという見当をつけていた、という話をわたしは北京で聞いた。ところが、じっさいには、中学生たちは10人に1人というような代表を選ぶのではなく、つぎつぎとのりこんできたのである。

(b) 交流でなにを学んだか

わたしは、各地の座談会で、交流活動からなにを学んだかという質問をだしたが、これについては時間の制限もあって十分な話はきけなかった。しかし、この質問にたいし紅衛兵たちが異句同音にいうことは、毛沢東主席に会見した感激ということであった。瀋陽、上海、長沙で会った紅衛兵たちは、いずれも各学校紅衛兵の幹部であって北京の大集会に参加して毛主席の接見をうけている。そして、いかにも若人らしい感覚で毛主席に会えたことがなによりもうれしかったし、大交流の参加の最大の収穫であったと語っている。このことは、こんにちの中国民衆の毛主席への崇拜がけっして上からつくられたものでないことを語っている。それは中国の革命が生んだ崇拜であり、紅衛兵たちとその親たちの生活と闘いの体験から生れた崇拜であったのである。

それでは、これ以外に「大交流」からかれらはなにを学んだのであろうか。話題となった主な点をあげるとつぎのようである。

(1) 大交流のなかで、文化大革命の当面の任務とされている“党内の資本主義の道を歩む実権派”が、各地でどのような装いをとっているかについて経験交流がおこなわれている。いうまでもなく党内の実権派やブルジョア的権威者は、自分でそう名乗っているわけではなく、さまざまなやり方で自分らの本質をかくしている。したがって、これらの実権派の正体をつきとめた先進的経験をきくことによって、各地の紅衛兵はその土地における闘争を深めることができた。

(2) 毛沢東思想をいかに「活学活用」したかの経験交流がおこなわれている。上海第一師範の学生は、大交流のなかで毛沢東思想が全国にゆきわたっていることを知って確信を深めたと語っている。

66年10月15日北京発の新華社電は北京にあつまって革命の経験交流をした人たちがなにを学んだかについて報道しているが、その通信もとくにこの点を強調してこう書いている。「北京での革命経験の交流は数多くあるが、そのうちでもっとも基本的なものは、毛主席の著作を大いに学び、毛沢東思想を大いに身につけることである。これが北京から各地にもどった紅衛兵たちの共通の思想である。」

(3) 紅衛兵たちは、交流の途中で、農民の家にとまったりして、解放軍と労働者、農民に学んでいる。とくに解放軍は紅衛兵の接待に大きな力をいれ、紅衛兵たちに影響を与えている。

(4) 大交流のなかで、かれらは革命的伝統の教育を受け、自らが革命のあとつぎになる決意を固めている。66年11月末までに北京を訪れた1,100万をこえる学生たちの大部分は革命軍事博

博物館や抗日軍政大学校史展で、中国革命の歴史を学ぶ展覧会をみている。この二つは、中小都市ではみられない充実した内容をもっている。そのほか、大交流の参加者たちは、延安、韶山、井岡山、広州の農民運動講習所などを参観している。わたしが瀋陽で会った紅衛兵も韶山に行っていたが、韶山にある「毛沢東同志旧居記念陳列館」の展示で、毛主席の6人の肉親が国民党のテロの犠牲になっていることを知って革命の先烈の流した血がいかに大きいかを知った、と語っている。韶山できいたところでは、毛主席の故居を訪れた人は、64年に約7万、65年が約20万であったのに、66年には二百数十万に達しているという。韶山一つをとってみても今年の大交流のなかで、いかに多くの人が訪れているかがわかる。

(c) 「大交流」と民衆の支持

学生たちの「大交流」は民衆の支持なしにはおこなわれなかった。食費などは国家が責任をもったが、どっとおしよせる学生をホテルに収容できるものではない。各都市は、まず学校と劇場にかれらを収容して、学生と家庭婦人がかれらを接待した。わたくしたちの中国訪問中に、団員の一人である菅谷直子氏にたいして、全国婦人連合会の幹部（書記処書記胡適秋、工作組副組長李林）は北京の家庭婦人が紅衛兵を情熱をこめて接待した状況をつぎのように語っている。

「北京の家庭婦人は各地から集まってくる紅衛兵を接待している。北京は革命の中心地であり毛主席の居住地でもあるので、8月から現在（11月末）までに1,100万の紅衛兵が上京した。婦人は飲水、茶の接待所を作り、街角に宣伝所、相談所を設けて接待に当たっている。北京西城区の二つの居民委員会はとくに立派にやっている。9月以来4回にわたり、多くの紅衛兵を受入れて、3,000人を接待した。婦人たちは飲水、茶の接待だけでなく、衣類の足りない時は大集会を開いて大衆に依拠して解決した。こうして一度に290枚のふとんが集ったこともある。食事も大衆討議により、半日に三つの大かまどが作られた。ドンブリ・箸も住民が持ちより、紅衛兵に毎食温い食事を供することができた。

石油工業部門に働いている人びとの家族は紅衛兵のため縫製部を作った。婦人たちは紅衛兵が夜寝てから彼らの服を調べて破れたところをつくろい翌朝着られるようにしておいた。紅衛兵たちはこれによって階級的な感情を高めた。この縫製部に裴鳳珍という71才の老女が参加していた。彼女は紅衛兵を熱愛し、自分の服を切って紅衛兵の服を修繕したばかりでなく、夜遅くまで働いた。周囲の者が心配して寝るようにすすめても、聞き入れなかった。ある老女は紅衛兵の休息中、苦しかった解放前の生活を語り伝えた。紅衛兵たちはこれを聞いて感動し、革命の達成を誓った。」

(2) 長征隊という新形式

「大交流」の運動は、紅衛兵運動全体と同じように、党内の実権派との闘争の足がためと、革命のあとつぎたちが自らを闘争のなかで鍛える側面とをもっていた。そして、この運動のなかで、後者の側面をいちだんと強くおしだして展開されたのが、「大交流」を徒歩でおこなう「長征」の運動であった。

まもなく「長征隊」と総称されるようになった徒歩による革命交流に先鞭をつけたのは、大連海運学院の学生が組織した「長征紅衛隊」（隊員15名）で1,000余キロの道のりを歩いて1ヵ月をついやして北京につき10月18日の北京の四度目の大集会に参加し、風雨にさらされた手製の大きな旗「長征紅衛隊」を毛主席におくった。

大連の紅衛兵のこの行動は人民日報に報道されるとともに、10月22日付の人民日報は「紅衛兵は遠征の困難をおそれない」と題する社説をかかげて、この新しい交流形態をつぎのように位置づけた。

「全国の大学、専門学校の学生、中学（高校クラス）の一部の学生が首都にきて革命の交わりをやり、各地の学生が互いに交わることは、学生自身が自己を教育する最良の方法の一つである。学生たちは互いに交わる革命大学のなかで、社会をよく知り、大衆をよく知り、階級闘争をよく知って、大きな波風に耐え、さまざまな試練を受けることができる。

大連海運学院の革命的な学生は、汽車や自動車にも乗らず、徒步行軍で革命の交わりを行なったが、これは非常に有意義な壮挙である。われわれは心から、これらの革命的な学生の長征演習の勝利を祝うとともに各地の革命的な学生が自ら志望し、可能な条件のもとでそうすることを希望する。

プロレタリア階級の革命事業、共産主義事業は人類の歴史上で最も偉大で最も困難な事業であり、その任務は重く、道は遠い。われわれ青年は必ず毛主席に永遠に忠実で、毛沢東思想に忠実で、党に忠実、人民に忠実であり、『紅軍は遠征の困難を恐れず、大自然も物のかずではない』という革命の伝統を継承し、後世まで伝えていかなければならない。」

(a) 長征でなにを学んだか

中国では、先進的な例は、すぐに全国にこだまするならわしになっている。10月の下旬から各地の紅衛兵が「長征」方式の交流を開始した。そして、はじまってから一ヵ月もたたない11月中旬までに、北京に数十隊の数百名の「長征隊」が詰めかけた。11月15日には、周恩来総理らが、北京滞在中の30余組の430名の長征隊と会見しているが、これらの長征隊は、遼寧、安徽、山東、河北、山西、河南の各省と内蒙古自治区から全行程を歩いて北京を訪れたものである。

この「長征隊」という新しい交流形式は、たんに汽車にのらないで歩くということではなく、文字どおりに風雨にさらされて思想と身体をきたえ、一朝有事のさいには解放軍にとびこんでいく、という性格をもっていた。すべての長征隊は、解放軍にみならって、長征の途上で「三大規律、八つの注意」を守った。かれらは祖国の一本一草を大切に、大衆のものは針一本、糸ひとすじも傷つけないようにした。多くの長征隊は、とまった家の水がめをいっぱいしなければ出発しなかったし、庭の掃除をおわらなければ出発しなかった。つまり、紅衛兵たちは、この「長征」をつうじて「さわぎ」ではなく、解放軍と同じ固い規律をまもって自らを鍛えたのである。

長征隊はまた、徒歩で途中は農家にとめてもらうことによって労働者・農民に学び、階級的感情をいちだんと身につけた。たとえば、山東省済南市の第16中学の紅衛兵10名は、長征隊を組織して、14の県と市を通過して北京にきて、11月10日の毛主席の第7回目の観閲に参加した。かれらは「長征」の途中で貧農や古参幹部の話をきいて「もつともいきいきとした、もっとも深刻な教育を受けることができた」と新華社記者に語っている。（「北京周報」66年47号7頁）

(b) 長征隊の十万人集会

長征隊の活動がはじまっていらい、かれらの主要な訪問地とされたのが、首都北京につづいては革命の聖地とみられている韶山の毛主席故居、井冈山と延安である。そのうちの韶山と井冈山へは今回われわれも訪れたが、66年の11月以降には、1日に3万から5万の紅衛兵が井冈山を訪れていた。そのなかには、山西省、河北省などから歩いてきているものもいたし、一部のものは夜行軍をやり、一昼夜で75キロも歩いている。

こうした「長征隊」という新しい運動形態がいかに広はんにとりくまわれているかは、まだ統計的にあらわすことはできない。しかし、その一つの手がかりとして、12月28日には北京に「長征」してきた紅衛兵10万以上の経験交流大会がおこなわれたことをあげることができる。この大会には数千の長征隊が長征旗をたなびかせて参加した。大会では、江蘇省無錫市の軽工業学院の「毛沢東思想紅衛兵赴京長征隊」の代表が体験を語ったが、かれらは無錫から39日をついやして北京にきていた。そして、かれらは長征中に社会の各方面に接触し、とくに労働者農民に学んだことによって、「長征」は巨大な学校であり、大熔鉱炉であることを深く知ったとのべている。そして、大会では周恩来総理と文化革命小組の江青第一副組長が演説して、「諸君はすぐれた革命の伝統を継承し発揚しているが、われわれは諸君に学ばなければならない」と激励した。

そして長征隊の活動は、まだはじまって2～3ヵ月であるが、はやくも大人の世界にも大きな影響をよんでいる。かって2万5000華甲のほんものの長征に参加した人たちのあいだでも、往年の革命精神に学ぶ意味で、瑞金—遵義—延安のコースを長征する企てがおこなわれているともいわれている。かれらは、「革命の小勇將に学べ」というスローガンをもって、すでにこの新しい「長

征」の準備にかかっているという。

たしかに、いかなる老革命家も、不断の自己反省や自己点検なしには誤りをおかす。ソ連の経験も中国の経験もこのことを示している。そして、中国の紅衛兵たちは、革命の先輩に学んで「長征」という大交流の新形式をみだし、いまではそのことによって、革命の先輩たちにも新しい風をふきこんでいるのである。

(3) 紅衛兵運動の意義と展望

66年の年末をもって紅衛兵運動の最初の半年はおわった。中国政府は、66年下半期の大学、中学の学業を停止して学生たちを自由に文化大革命にとりくませたが、この学校の授業停止は、67年上半期までに延期されることになった。このことからみて、紅衛兵の全国的な運動がさらに半年以上つづけられることは確実となった。

このことに関連して、わたしは中国をはなれるまえに、紅衛兵の運動は大きな成果をあげたのにちがいないが、もうそろそろ正規の学業にもどってもよい、という気分はでていないか、という質問をだした。しかし回答はとんでもないということであった。この点について、上海第一師範の紅衛兵は、つぎの二つの理由をあげている。

(1) さらに運動をつづけて、教育方針の徹底的な転換をかちとりたい。従来の教育方針の教育はうけたくない。

(2) 学生を教育する仕事は、革命のあとつぎを養成する仕事であり、まず自分自身が革命家にならなければならない。階級闘争の知識を十分に学んではじめて教育ができる。

同じ質問にたいして、長沙師範学校の紅衛兵は、適当な時期には授業に入らなければならないことを認めながらも、文化大革命そのものはつづけなければならないとして、その理由をつぎのようにのべた。

「文化大革命はさらに徹底的につづけなければならない。現在のこの大風、大波のなかで自らを教育しなければならない。文化大革命は階級闘争のもっともよい教室であり、文化大革命そのものがもっともよいクラスである。」

たしかに、中国の人民大衆も紅衛兵も、かれらの文化大革命の大業を中途半端で打ちとどめにしようとはしていない。そして、66年12月からは、文化大革命の高波は、いよいよ工場、農村にもまきおこって運動は新しい段階に入っている。この新しい段階において紅衛兵の運動がいかなる役割を演ずるかは、これからわれわれが観察していかなければならないところである。

日本の商業新聞が北京電で報じているところでは、12月から1月にかけて、文化大革命運動全体に新たな、いっそうはげしい波がおとずれているようにみえる。正式な発表はまだないが、この

段階において首都の紅衛兵たちが彭真らの反党、反社会主義分子を大衆集会にひっぱりだしてつるしあげをおこなった、といわれている。

たとえば、12月10日には「中央戯劇学院毛沢東主義戦闘団」という名義のガリ版ずりの小字報がはりだされたが、それによると紅衛兵たちは12月3日夜、彭真、劉仁（元北京市委員会第2書記）、万里（北京市副市長）、田漢（劇作家）を自宅に急襲してつれてきてじんもんしたとっている。（12月11日付毎日新聞） そのほかにも、紅衛兵たちが相当の反党要人のつるしあげをおこなったとの大字報がはられている。

これらの紅衛兵の動きに関連して、日本では、紅衛兵の運動がけっきょくは毛沢東・林彪らの権力闘争に動かされたものであるとの見解がねずよくおこなわれている。

たしかに紅衛兵運動の一つの特徴は、はじめから毛沢東主席と毛沢東思想を徹底的に擁護した運動であった。紅衛兵たちは、そのことを公然と宣言していたし、かれらの運動はまた毛主席、林彪副主席らによって積極的に支持された。したがって、8月くらい全国をかけめぐった紅衛兵の運動が、いわゆる中共主流派に有利なものであり、「反主流派」に不利なものであったことは明らかである。その意味で、紅衛兵の運動は、文化大革命をめぐる中共の党内闘争に無関係であったのではなく、一定の重要な役割を演じてきた。

しかし、このことをもって、紅衛兵運動をいわゆる「毛・林ライン」に踊らされた運動とすることはできない。毛沢東主席は、文化大革命にあたって、なぜ学生たちをあのようにたちあがらせたのか。この点については、北京の壁新聞が毛主席の談話として伝えているものが重要なポイントをついている。

北京からの電報によると12月18日に北京市内の各所に「毛沢東主席が中央の指導者たちにおこなった談話」という壁新聞がはられたという。これは首都紅衛兵造反団などが12月7日付で作成したものといわれ、談話は10月におこなわれたとされているが、それによると、毛沢東主席はかれが青年を思う存分にたちあがらせた理由をつぎのようにのべている。

「1. 青年は文化革命の大軍であり、彼等に思う存分にやらせなければならない。私は北京に帰ってきて（毛主席は昨年秋以来、長く上海付近におり、ことしの7月末北京に帰ってきた）まことに耐えがたい思いがした。学生の運動は冷えきっており、一部の学校は正門までも締め切っていたからである。だれが学生の運動を鎮圧したのか。学生の運動を鎮圧するものは北洋軍閥みたいな連中である。

1. いま文化大革命に反対しているのは米帝国主義、ソ連修正主義、各国の反動派である。『内に対するのと外に対するのとは区別せねばならない』といった口実をかりて、壁新聞が張り出されると、これを覆いかくすようなことは許されない（劉少奇国家主席をはじめ幾人かの指導者批判

の壁新聞は外国人にみられてはよくないとの理由ではがされたり、ほかの壁新聞で覆いかくされたりした）これは方向を誤っており、青年の運動にはいかなるワクをはめることも許されない。青年運動に対するいっさいの制限をこっぴどみに打ちくだかねばならない。

1. 共産党でありながら大衆を弾圧することは、マルクス・レーニン主義にそむくものである。諸君は大衆の学生 — それも小学生になって大衆から学ばねばならない。事務所にすわって下からの報告を聞いているのではいけない。なによりも大衆にたよらなければならない。

1. およそ学生運動を鎮圧したものはすべて、よい目にあわないであろう。」

しかも中国の青年たちは、毛沢東のこうした考え方を、かねてから知っており、心から敬服していた。たとえば、「毛主席語録」の一節にある毛沢東のつぎの言葉は、いま紅衛兵たちがもっとも愛誦している言葉の一つである。

「世界はきみたちのものであり、またわれわれのものである。しかし、結局はきみたちのものである。きみたち青年は、午前8時、9時の太陽のように、生气はつらつとしており、まさに伸びざかりの時期にある。希望はきみたちにかけている。」

これでわかることは、毛沢東はだれよりも青年と学生を信頼していたのであって、かれらを利用しようとしていたのではない。

毛沢東は、学生たちに自分の考えをおしつけようとしたのではなく、学生の創意を百パーセントに生かすことをつうじて、中国の情勢が正しく発展すると信じたのである。中国の幹部たちは、プロレタリア文化大革命は毛沢東主席の指導によって展開されたという。その意味では紅衛兵の運動も毛主席の指導によって展開されたといってよい。しかも、この紅衛兵の運動は、政府の権力によってつくりだされたものではなく、あくまでも大衆の意志によってつくりだされたものである。

紅衛兵の運動が、このように巨大な力を発揮できた力の源泉としては、この世代の人たちが、ちょうど中国の社会主義とともに生長した、もっとも資本主義に毒されていない人びとであることに目をむける必要がある。かれらは資本主義に毒されていないし、また大人たちよりも「四旧」に毒されていないだけに「四旧」反対の先頭にたつことができた。そこに、紅衛兵たちが、文化大革命で大きな貢献ができた理由があるし、毛沢東はだれよりもそれをみぬく力をもっていたのである。

文化大革命は、中国の社会主義の前途にかかわる革命であったから、それはじつにはげしい政治闘争としてすすめられた。これまで毛沢東の盟友であった多くの人も、はげしい批判にさらされた。しかし、その闘争の発端と発展が示すものは、個人あるいは政治グループの権力が争そわれたのではなくて、資本主義への道が社会主義かの基本的な路線が争われたことである。そして、この争いにおいて、中国の若い世代は、圧倒的多数をもって、変色しない社会主義への道を歩む決意を表明した。紅衛兵運動の真の意味は、それがいずれかの派に利用されたことにあるのではなく、かれら

がくもりのない目によって、だんことして社会主義の道を支持したことにある。

そうした意味で、紅衛兵の運動は、1967年度においても、プロレタリア文化大革命の一翼として、その積極的役割を演じつづけるであろう。